

スポーツの再社会化と地域スポーツ振興の関連性について

ーラグビー経験者の競技復帰要因とラグビーのまちづくりに注目してー

船越達也*

藤本淳也** 永松昌樹*** 長ヶ原誠**** 佐々木康*****

抄録

本研究の目的は、過去のスポーツ競技経験者が再び同一種目に競技復帰（再社会化）する要因を探るとともに、競技への復帰行動と地域スポーツ振興との関連性について検討することである。

2016年五輪では7人制ラグビーが正式種目として採用され、2019年には我が国でラグビーワールドカップが開催される。現在、日本でラグビーは幼児からトップレベルのプレイヤーまで幅広い年齢層で競技がされている。しかし、我が国のラグビー競技人口は年々減少傾向を示しており、将来ラグビー競技人口を増やしていくためには、幼児期、児童期、少年期にラグビーを始める（社会化）機会の促進と、青年期や壮年期のラグビー経験者が再び競技を行なう（再社会化）機会の促進が有用である。

かつて競技をしていたが現在は競技から離れているラグビー経験者の競技復帰を促し、その姿に影響された次世代の若年齢者や未経験者のラグビーに対する関心を高めることが競技人口を増加させる一つの要素になると考えられる。そこでラグビー競技経験者の競技復帰に対する意識について分析した結果、各ステージにおける競技者の意識傾向には違いがみられ、それに応じた働きかけをする必要性がみられた。

また、青年期や壮年期の競技人口の増加は、地域におけるクラブ数や大会数の増加そして観戦者の増加を通して、「スポーツによるまちづくり」に貢献できる。

東大阪市には「高校ラグビーのメッカ」とされる「花園ラグビー場」が存在し、我が国におけるラグビーの拠点のひとつとなっている。そのため、東大阪市は「ラグビーのまち」を表明して市のまちづくり施策に「ラグビー」を活用している。このようにスポーツ種目のイメージを活用してまちのイメージづくりをすることでスポーツ人口の増加を含めた普及活動やスポーツイベントの誘致、さらにそのようなイベントの運営サポートをすることによってまちの活性化や地域スポーツ振興という効果に影響を与えている。

キーワード：再社会化，地域スポーツ振興，ラグビー，競技復帰，まちづくり

* 大阪国際大学 〒570-8555 大阪府守口市藤田町 6-21-57

** 大阪体育大学 〒590-0496 大阪府泉南郡熊取町朝代台 1-1

*** 近畿大学 〒577-8502 大阪府東大阪市小若江 3-4-1

**** 神戸大学大学院 〒657-8501 兵庫県神戸市灘区六甲台町 1-1

***** 名古屋大学大学院 〒464-8601 名古屋市千種区不老町

The relation between re-socialization of a sport and local sport promotion.

—Focus on the competition return factor of rugby player and city planning

by the Rugby Football—

TATSUYA FUNAKOSHI * JUNYA FUJIMOTO** MASAKI NAGAMATSU***
MAKOTO CHOGAHARA**** KOU SASAKI*****

Abstract

The purpose of this study is to investigate the factors that sport player in the past to compete return (Re-socialization), and it is to investigate the relationship with the local sports promotion and behavior of the competition return.

Sevens rugby was adopted as an formal item in the Olympics 2016, and Rugby World Cup will be held in Japan in 2019. Currently, rugby is played in a wide range of age groups from infancy to the top-level player in Japan. However, rugby population shows a decreasing trend year by year in Japan, in order to increase the number of rugby player in the future, the promotion start rugby infancy, childhood, the boyhood of opportunity (socialization) , promote rugby experience of late middle age and adolescence to play again in the opportunity (re-socialization) is useful.

It is necessary to encourage competition return player with a rugby experience not play right now. Because it is considered to be one of the elements that to have interest in rugby of inexperienced and young people of the next generation that was influenced by them increases the competition population. Therefore, the results of analyzing consciousness competitions return by rugby experience, there is a difference in the consciousness trend players at each stage. And I showed the need for an appropriate approach to them.

In addition, the increase in competition population of late middles age and adolescence, increase competition and the number of Clubs, the spectators in the region. And it contributes to the "City planning by sports". There is a "Hanazono rugby stadium" in the Higashi-Osaka, it is recognized as "Mecca of high school rugby", and has become one of the centers of rugby in Japan. So, Higashi-Osaka City expressed as "The city of Rugby", they take advantage of "rugby", in the measures in all areas of city planning. Such an approach to the image-building of the city by the image of the sport has affected the effect of local sports promotion and activation of the city.

Key Words : Re-socialization, Local sport promotion, Rugby-Football ,
Competition return, City planning

* Osaka International University 6-21-57tohda-cho, moriguchi, Osaka, 570-8555

** Osaka University of Health and Sport Sciences 1-1 Asashirodai, Kumatori-cho, Sennan-gun Osaka 590-0496

*** Kinki University 3-4-1 Kowakae, Higashiosaka City, Osaka 577-8502

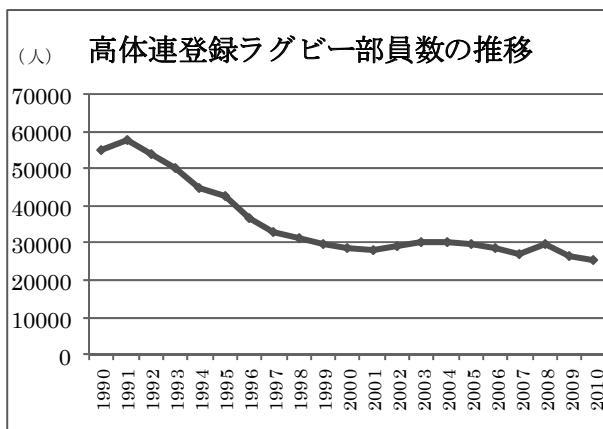
**** Kobe University graduate school 1-1Rokkodai-cho,Nada-ku,Kobe,657-8501

***** Nagoya University graduate school Furo-cho, Chikusa-ku, Nagoya, 464-8601

1. はじめに

2016年リオ・デ・ジャネイロ五輪では7人制ラグビーが男女ともに正式種目として採用され、2019年には我が国でのラグビーワールドカップ（以下、RWC）開催が決定している。現在、プロ契約選手の存在もみられる企業が母体となったチームで構成される我が国ラグビー最高峰リーグであるトップリーグをはじめ、各地域の実業団チーム、クラブチーム、大学・高専、中・高校生、幼児から小学生が中心のラグビースクールなど幅広い年齢層で活動が行われている。

しかしながら近年、我が国におけるラグビーの競技人口は年々減少傾向を示しており、競技者数が最も多い高校生の高体連登録人数では1991年の57,826人をピークに2010年には25,379人と激減している。これは若年者のスポーツ離れ、他競技種目への人気集中、ラグビーに対する「危険」、「痛い」、「難しい」など、ネガティブなイメージとともに高校生以上のチームでは1チーム最低15名のメンバーが揃わなければ単独チームとして試合にエントリーが出来ないという競技特性がラグビー人口の減少に影響を与えていると考えられる（図1）。



（図1） 高体連登録のラグビー部員総数の推移

長積（2011）は我が国におけるスポーツ振興システムにはスポーツ参加者の連続性や継続性を確保する仕掛けがない点を指摘しており、他のスポーツ種目と同様にラグビー競技者においても競技継続が難しい現状が見てとれる。

ところで、高校野球のメッカが甲子園球場あることと同様に、高校ラグビー界でのメッカとされるのが「近鉄花園ラグビー場（以下、花園ラグビー場）」である。本ラグビー場は、高校生のみならずトップリーグや大学ラグビーから、幼児、小学生を対象としたラグビースクールの試合会場としても使用されている。

毎年さまざまなラグビー大会が開催されているこの花園ラグビー場は我が国で最初のラグビー専用競技場として、1929年大阪府東大阪市に設立された。そこで毎年年末から年始にかけて開催されるのが「全国高等学校ラグビーフットボール大会」であり、他競技種目でいうところのインターハイに相当する高校ラグビー最大の大会である。全国高等学校ラグビーフットボール大会の開催会場としては1963年より今日まで使用されており、「高校ラグビーのメッカ」というイメージより東京の「秩父宮ラグビー場」とともに西日本のラグビーの拠点となっている。

全国の予選大会を勝ち抜いた各都道府県の代表が約2週間の日程で日本一の座を目指して、毎年花園ラグビー場に集結をするのである。大会期間中は出場する選手をはじめその保護者や学校関係者が高校生たちの熱い戦いを観戦するが、観戦者の中にはそれらに属さない者も多く含まれている。今までに競技経験はないが純粋にラグビーという競技種目に興味があって観戦に訪れる者もいるが、過去に競技者としてラグビーに関わった経験を持つ観戦者も多い。ラグビーは愛好者が数人集まればすぐに競技できるという手軽さに欠けるため、現在は競技を行わずあるいは行えずに専ら観戦のみという観戦者も少なからず存在していることが予測できる。

競技人口の減少に歯止めをかけ、今後再びラグビー競技者を増やしていくためには、ラグビーに対して関心が薄い層や未経験者からの参加を男女問わず獲得していくことが不可欠である。特に競技人口増加の重要なターゲットとなる若年者層にとって、ラグビーは野球やサッカーと比較した場合、メディアで取り上げられる機会は少ない。そのため、若年者層のラグビーに対する関心を高めるためには身近な人物が実際にラグビーをプレーしている姿に接する機会を増やすことが効果的であり、この関心の高まりが若年者層からの競技参加を促進する一つの要素になるものと考えられる。そこでかつてラグビーを競技しており、現在は競技をしていない競技経験者が再び競技復帰することで、その姿に触発された子供や孫といった若年層者や未経験者がラグビーという種目に興味や関心を抱き、そこからの競技参加を促進できれば、再び我が国における長期的なラグビー競技人口増加につながると期待できる。

このような機会を創出して、それを継続・拡大させていくことによって現在は競技から離れているラグビー経験者の競技復帰を促すことが期待できるが、そのためには競技を継続している者や競技復帰の途上にいる者とともに競技参加をしていない競技未経験者の意識の把握や復帰に向けての環境

や条件の整備が必要となる。

木田 (2013) がスポーツイベント開催による社会的効果について、イベントの開催運営主体とともに開催地域内に居住する住民および開催地域外に居住する住民の「三者のそれぞれ、もしくは三者間に対してもたらず効果」と指摘する通り、このような取り組みは競技者やその関係者だけではなく、競技場を含めた周辺地域の人々によるサポートを得て広く認知を拡大していくことを示している。それらを活用する実践例としての取り組みについてスポーツの競技人口の増加を含めた普及活動や競技大会といったスポーツイベントの誘致、さらにそのようなイベントの運営サポートをすることを通じてまちの活性化や地域スポーツ振興といった効果を図る取り組みについて報告するものである。

2. 目的

本研究の目的は、過去にスポーツをしていた競技経験者が再び同一種目への競技復帰(再社会化)する要因を探るとともに、競技への復帰行動に伴う競技人口の拡大と地域におけるスポーツ振興との関連性について検討することである。

具体的には、ラグビー競技経験者に対して現在の競技実施状況を尋ね、競技実施者には現在の競技参加意図や今後の継続意思について、また競技非実施者には非参加の意図や復帰意思の有無を尋ね、ラグビー競技経験者の競技復帰に関する促進要因や阻害要因とともに競技再開条件などを明らかにする。

また中高年齢者の競技復帰者を対象としたクラブ設立や地域スポーツイベントの開催による地域スポーツ振興とまちづくりの可能性を検討する。

3. 方法

本研究では、まず過去にラグビーの競技経験を持つ中高年齢層におけるラグビーの競技実施の現状と実施行動に伴う意識について把握した。近年では女性ラグビープレイヤーの増加傾向もみられるが、過去の競技経験者による現状の行動・意識について把握を行うため今回の研究では男性による回答のみを採用した。

調査は2回に分けて実施した。主に過去ラグビーの競技経験を持ち、すでに競技復帰を果たしている競技者を対象として2013年4月28日に花園ラグビー場にて開催された「第7回 関西ラグビーまつり」と同時開催された「第9回昔なつかし高校OB

交流戦」出場チーム(12校)の出場選手に対してアンケート(A4用紙3枚)による意識調査を行ない、230名より回答を得た。

また、現在は競技を行わず専ら競技場における観戦行動のみという過去のラグビー競技経験者の傾向を把握するために2013年12月27~28日に同じく花園ラグビー場にて開催された「第93回 全国高等学校ラグビーフットボール大会」における観戦者に対してアンケート(A4用紙3枚)による意識調査を行ない493名より回答を得た。それらのサンプルの中から女性と現在も競技実施をしている者を除き、なおかつ現在競技復帰群による回答者がすべて20~50才代であったことから「~10才代」及び「60才代~」も除いた225件のサンプルを採用した。

これら2種類の調査結果を比較検討することで、過去にラグビー競技経験を持つ者について、現在の競技参加状況の有無の違いによるラグビー参加・不参加に関する意思や参加行動に影響を与える要因の傾向を探り、過去の競技経験者の競技復帰につながる条件や環境の整備における現状の整理と今後の課題について分析・検討をした。

また、「ラグビーのまち」としてまちづくりを推進する東大阪市の現状の取り組みや今後の施政方針などについて聞き取りを行い、ラグビーを活用したまちづくりのあり方について検討を行った。

4. 結果及び考察

4-1. 「昔なつかし高校OB交流戦」について

毎年、関西ラグビーフットボール協会の主催のもと近畿2府4県の各ラグビーフットボール協会によるサポートを得て、春季シーズンのイベントとして2007年から「関西ラグビーまつり」が開催されている。「昔なつかし高校OB交流戦(以下、高校OB交流戦)」は、関西ラグビーまつりのひとつのプログラムとして実施されているが、関西ラグビーまつりの開催よりも早く2005年から開催されている。

その開催のきっかけは協会や自治体による主導ではなく、大阪府下数校の高校OB達の発案で始まったものである。その後も関西ラグビーフットボール協会のサポートを得ているものの基本的には毎年持ち回りで大会運営を行なう「幹事校」を中心に参加各校の「幹事」及び代表世話人たちによって自主運営されている活動である。

初めての開催から参加校は少しずつ増加しており、2013年の第9回大会では12校の参加があった。また次回大会から2校の新加盟が承認されたが、基

本的には単年のみの参加は認められず、継続的な参加が見込めるように新規参加校の中での自主運営組織の確立と新加盟が承認される前年大会の運営サポートを行なうことが加盟の条件という徹底ぶりである。

大会では各校OBによって編成されたチームでゲームに出場する。そのため、出場者は基本的に全員高校ラグビー部に所属経験のある者ばかりである。ゲームは関西ラグビーまつりの主要試合の行われる花園ラグビー場の第1グラウンドではなく、第2グラウンドの正規サイズを用いて行われるが、ゲーム時間は正規の40分ハーフより短い15分である。また、各チームの登録人数には制限がなく、試合中の選手交代も随時自由に行なえることが特徴であるが、その他は正規ルールと同じく行われる。

参加校の中には、すでに統廃合によって現存しない高校のチームがあったり、名称変更された高校が旧名称・旧ユニフォームによって出場するケースなどがみられたり、勝敗や順位などにこだわらず各チーム3試合程度を行なう内容となっている。

大会参加に向けて定期的に集まって練習を行なうチームもあれば、大会直前だけ活動を行なうチームもあるが、ケガ・事故防止のため入念な出場準備をすることが参加条件としてあげられている。

4-2. 調査対象者属性

今回の全調査対象者は、まず高校OB交流戦出場者を「競技復帰群」、高校ラグビー大会観戦者より、現在競技を一切行っていない者を抽出して「競技未復帰群」と分類した。また、その各群をさらに「日常におけるラグビーの競技実施状況の有無」と「今後の競技実施意思の有無」によって以下のように分類して、それぞれのグループについてA群からE群と名付けた(表1)。

(表1) 本研究の調査対象者とその分類

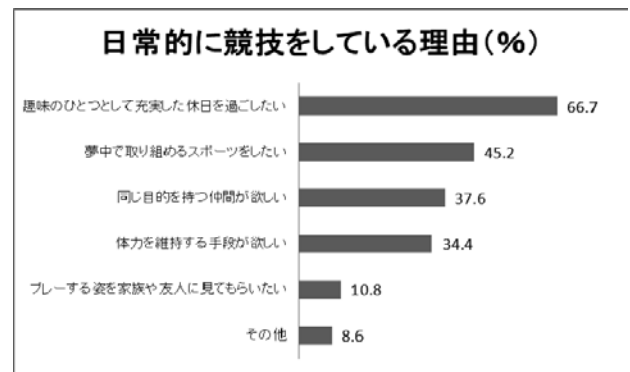
	日常の 競技実施 状況	今後の 競技実施 意思			
		人数	人数		
競技 復帰群	あり	93	—	A群	
	なし	137	あり	108	B群
			なし	29	C群
競技 未復帰群	あり	0	—	—	
	なし	225	あり	94	D群
			なし	131	E群
合計		455			

また、A群はすでに日常で継続的に競技をしてい

る「復帰定着群」、B・C群は毎年開催される本大会に出場するものの日常では競技を定期的に行っていない「復帰途上群」、D・E群は過去から現在に通じて競技を行っていない「未復帰群」と分類した。

4-3. 復帰定着群の競技実施理由

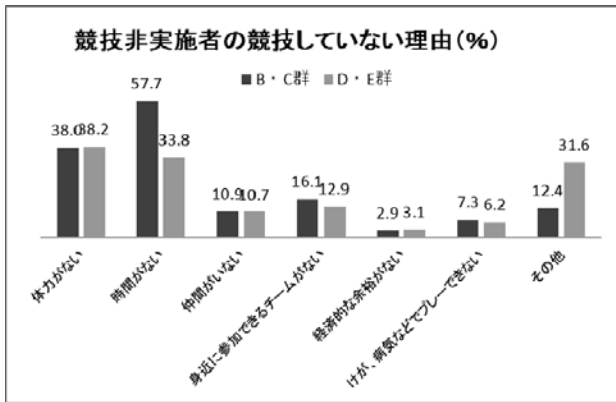
高校OB交流戦に出場した者の中から日常的にプレーしている者(A群; 93名)に競技実施理由として当てはまる項目を複数回答可で聞いたところ以下の通りであった(図2)。日常的に競技をしている者は、今大会出場した各自の母校チームだけでなく、クラブチームや所属する職場のチームなどで定期的にプレーしており、その実施理由のほとんどが趣味ややりがい、仲間との交流といった楽しみを求めて実施している傾向がみられた。



(図2) 復帰定着群の競技実施理由

4-4. 復帰途上群と未復帰群の競技非実施理由

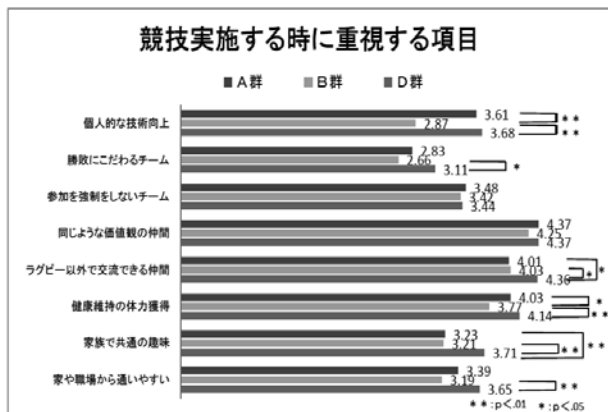
一方、日常で継続的に競技をしていない者をラグビーの競技経験のある者(B・C群; 137名)とない者(D・E群; 225名)に分類して、ラグビーを競技していない理由を複数回答可によって尋ねたところ、競技経験のあるB・C群の者が「時間が無い」と回答した者が多く、その他では大きな傾向の違いがみられなかった(図3)。競技経験があり、高校OB交流戦に出場している者の方が競技再開に向けて積極的な姿勢でいるが、継続的な競技活動に定着するまでには至らず、その機会を得ることが出来ていないことが推測できる。高校OB交流戦出場者が20~50才代である者が占めている点を考慮すると日常における公私に渡って多忙な生活を余儀なくされる者は多く、なかなか意思はあっても実現できない現状が推測できる。



(図3) 競技非実施者の競技していない理由

4-5. 競技実施時の重視項目における傾向の違い

現在継続してラグビーを競技している者 (A群) と現在競技をしていないが過去に競技経験があり、今後競技再開をしたいという者 (B群)、および現在も過去も競技経験がないが今後は競技を実施したいという者 (D群) の三者について、競技を実施する時にどのような要素を重視するかを尋ねた (図4)。各項目は「かなり重視する」から「全く重視しない」まで5段階に分けて回答を求め、各群におけるその平均値を比較したものである。各項目の比較にはt検定を用いてその有意差の有無を検分した。



(図4) 競技実施時に重視する項目

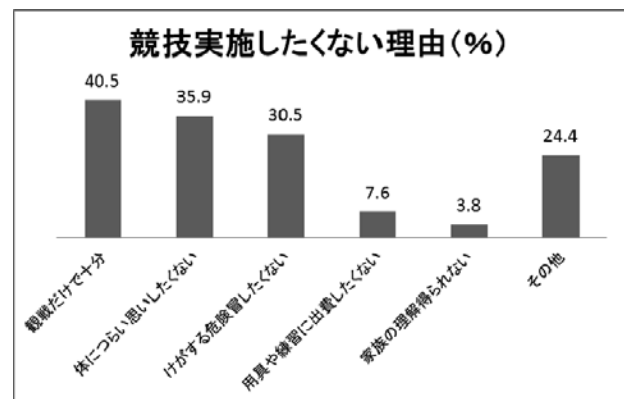
実際に競技経験のないD群に属する者が各項目において高く重視する傾向がみられ、競技未経験者のラグビーという競技に対する興味、関心の高さがうかがえた。また同時に各群ともに「同じような価値観」や「ラグビー以外で交流できる」といった「仲間」という項目を重視しており、この「仲間」が競技継続、再開、開始をする際に重要なキーワードとなる傾向がみられた。

三者間で比較をするとB群の数値が有意に低い

項目がみられ、実際に大会に出場して競技復帰をしているものの今後の継続を促進するためには、他に重視している項目が何であるのかを明確にする必要がある。

4-6. 未復帰群の競技実施したくない理由

競技未復帰群で今後も競技参加する意思のない者 (E群) に実施したくない理由を複数回答可によって尋ねたところ、「観戦をするだけで十分」という者が最も多かった (図5)。それ以外では、「体につらい思いをしたくない」「けがをする危険を冒したくない」といった身体的にネガティブなイメージを理由にするケースが多くみられた。「その他」には、「経験がないので」「他のスポーツをしているから」といった意見が多くみられたがラグビーという種目に対するネガティブな意見は少なく、今後の競技イメージの改善や開始する機会の提供が出来れば競技実施に対する意識を変えさせる可能性がうかがえた。



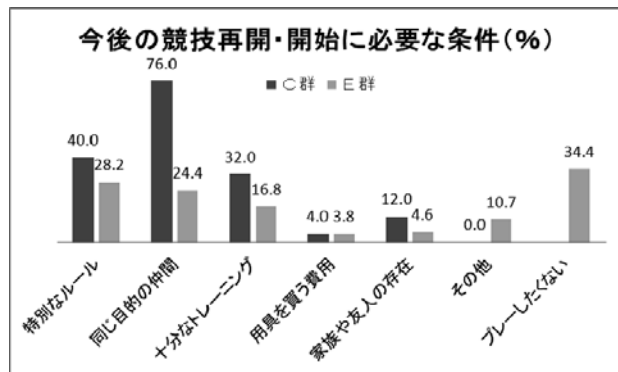
(図5) 未復帰群で今後も競技意思のない者の競技したくない理由

4-7. 競技意思のない者の競技実施に必要な条件

競技経験を持ちながら今後競技の再開をする意思のない者 (C群) と競技経験がなく今後も開始する意思のない者 (E群) に属する者に「もしどのような条件が揃えば競技再開 (開始) を考えるか?」という質問では、C群においては「同じ目的の仲間」の存在が突出して高く、今回の高校OB交流戦のような競技イベントをきっかけとして、すでに継続実施している仲間と一緒に大会参加する仲間の働きかけによって復帰定着者に移行する可能性が大きいと思われる (図6)。

それ以外では両群ともに「(無理なくプレーができる) 特別なルール」や「(競技実施のために行なう) 十分なトレーニング」などが条件として挙げら

れ、一定期間blankのあるプレイヤーが十分な準備無くプレーをした場合の危険性を認識した回答が得られた。このことは中高年齢者が再び競技復帰をする際には、無理なくプレーできる状況を整備・提供する必要が示された。E群においては「(いかなる条件が揃っても)プレーしたくない」という意見もみられたが、それ以外の者は競技開始する環境と条件の整備が進めば、競技参加者を獲得できる可能性がみられた。



(図6) 競技再開・開始に必要な条件

4-8. ラグビーを通じた地域スポーツ振興の現状

4-8-1. 従来からの取り組み状況

1988年～89年にかけて政府が行なった政策事業のひとつに「ふるさと創生事業」がある。我が国の各市区町村に対して政府が一市区町村につき1億円を交付して独自の創意工夫による地域振興を促進させることを図ったものである。各自治体は地域のインフラや観光事業の強化などに積極的に投資を行ない地域の経済的な活性化を促進する動向が全国的に拡大していった。

東大阪市には「花園ラグビー場」があるだけでなく、大学や高校ラグビー部をはじめ、大阪府下の他の市町村と比較しても3つのラグビースクール、11校の中学校ラグビー部が存在するなど、近畿地区における最もラグビーが盛んな地域のひとつである。

その東大阪市が全国的な地域活性化政策を施行する各自治体の流れに後押しされ、1991年より「ラグビーのまち」というキャッチフレーズとマスコットキャラクター「トライくん(図7)」を掲げて、ラグビーというスポーツが持つ「力強さ・たくましさ」「連帯性・団結力」「友情・すがすがしさ」といったイメージを市のまちづくり施策の全分野へ活かしていくと表明して地域の町おこし運動に取り組んでいった。

スポーツを用いたまちのイメージ作りの動きは

サッカーJリーグ鹿島アントラーズが本拠を構える茨城県鹿嶋市などでもみられ、交通の不便さから「陸の孤島」と評された町が、2002年のW杯サッカーの開催地に選ばれたことが契機となり、「サッカーの町・カシマ」を表明した。



(図7) 東大阪市のマスコットキャラクター「トライくん」

Jリーグ発足時に加盟した鹿島アントラーズがすでに存在していたが、市当局が「新鹿嶋市総合計画2002～2011年」において6つの「まちづくりの目標」を設定して、その第一に「スポーツ先進のまち」という目標を掲げたことが「サッカーの町」の浸透を促進した。橋本(2010)は同市が「サッカーの町」を表明した背景として、プロサッカーチームの存在を1番目に挙げており東大阪市のケースとは異なっているが、2番目の要素としてアントラーズのホームスタジアム「茨城県立カシマサッカースタジアム」が存在を挙げている。スポーツによるまちのイメージ作りについてチームの存在に依存したか、競技場のイメージに依存したかという点が異なるが、ともにスポーツの持つイメージをまちづくりに活用した実践例である。

4-8-2. RWC誘致室の設置

2009年7月、4年に1度開催されるラグビーワールドカップ(RWC)の2019年における我が国での開催が決まった。そこで東大阪市は、翌2010年4月に「RWC誘致室」を設置して、国内数か所で開催されるRWCの開催会場として花園ラグビー場への誘致に取り組んでいる。

この推進室の活動は、会場誘致に向けた地域住民の支持の高さをアピールするために日本ラグビーフットボール協会やRWC組織委員会に対する署名活動などの他に様々なイベントを企画・開催している。地域におけるラグビー普及啓発の推進を目指して、市内の幼稚園、保育所33園にラグビーボールを配布したり、地域の祭りやイベントに積極的に参

加して活動のPRをしたりという誘致活動に対する地域住民の理解と協力を得る取り組みが継続されている。

4-8-3. ラグビー各種競技会の開催とボランティア活動

前述したように花園ラグビー場では、「全国高等学校ラグビーフットボール大会」だけでなく、国内外から様々なレベルの競技会の開催をRWC誘致室のもとで積極的に推進している。それら競技会の開催時に会場内外でイベント運営を支えているのが、地域住民を中心としたボランティアスタッフの存在である。

各種大会でのサポートをRWC誘致室が作成した「誘致ラグーシャツ(図8)」を着用して地域住民との連携によって行うことでRWCの誘致活動の周知を図るだけでなく、地域住民の関心をさらに高めて行くことを目指している。

東大阪市では、その他でも登下校時の子どもを見守る地域住民の活動としての「愛ガード運動」においても教育委員会から貸与されたこの誘致ラグーシャツを活用して、「ラグビーのまち」としてのイメージ浸透を図っている。



(図8) 東大阪市のRWC誘致ラグーシャツ

4-8-4. 東大阪市の今後の展開

2015年3月にRWCの開催地が正式に決定した後も東大阪市は花園ラグビー場周辺地域一帯を整備して、一大スポーツ拠点にする構想を持っている。

また、東大阪市はRWCの誘致に向けて、大会開催条件である花園ラグビー場のナイター用照明や大型スクリーンの整備のために、花園ラグビー場の所有者であった近畿日本鉄道株式会社に対して昨年より施設の譲渡を要請しており、本年両者の合意に至った。

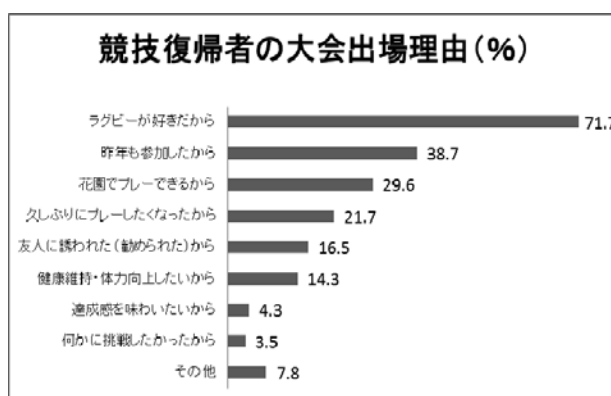
これらのように東大阪市は「ラグビー」という一つのスポーツ種目を活用して、2019年のRWC開催時の会場誘致を柱に商工会議所や自治会、青年会議所などと連携して、ラグビーの競技普及といった

地域スポーツの振興を含めた地域の活性化を通じたまちづくり活動をこれからも継続していく。

4-9. 競技復帰者の大会出場理由

高校OB交流戦への出場者全員(A群、B群、C群)に本大会への出場理由を尋ねたところ、「ラグビーが好きだから」という理由が最も高かったが(71.7%)、ついで「昨年も参加したから(38.7%)」という継続的な出場を望む声も多くみられ、さらに「花園(ラグビー場)でプレーできるから(29.6%)」という出場理由もみられた(図9)。

高校ラグビー経験者に対して提供される花園ラグビー場における競技大会の開催は、現在も競技を続けるプレイヤーをはじめ日常的に競技をしていない競技経験者に対しても今後の競技再開の機会を与えるひとつのきっかけとなりうる可能性は大きい。



(図9) 競技復帰者の大会出場理由

現在の高校OB交流戦は大阪府下の高校を対象に開催をされているが、今後は趣旨に賛同する同様なチームを増やして、地域の自治体との連携を図りながらこのようなイベントを継続、拡大していくことによって、現在は競技生活から離れているラグビー競技経験者の競技再開につながることを期待できる。また、競技経験者の競技復帰は、それに触発される次世代の競技者獲得にもつながることで減少傾向にある我が国のラグビー競技人口の増加に対する効果も期待できる。

5. まとめ

ラグビーの競技経験者において、復帰定着に至っていない復帰途上群には競技復帰意志を持つ者は多く、競技再開の機会を与えられることで復帰につ

ながるきっかけとなる可能性がある。競技人口増加を目指すにあたり、このような中高年者を対象とした競技経験者の復帰機会を与えるイベントの継続的な実施は有効であると考えられる。

また、競技経験者の競技復帰に際して、その各ステージにおける「競技をする際に重視する項目」といった意識には相違点がみられ、競技再開を促進させるためにはその傾向把握と各ステージの特徴を踏まえたアプローチが必要不可欠である。

さらに復帰途上群と未復帰群の「競技をしていない理由」や「競技再開（開始）に必要な条件」についてもその傾向に違いがみられ、競技未復帰者に対して積極的に参加を促す働きかけが求められる。

このような競技イベントの開催とともにラグビーを通じた東大阪市の取り組みがみられるように「スポーツによるまちづくり」を展開していくためには、競技人口の増加に取り組むことが不可欠である。スポーツ経験者の競技復帰（再社会化）は、競技人口増加への新たな活路であり、地域スポーツ振興との関連性を持たせることで地域活性化にもつなげることができると考えられる。

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです。



参考文献

- 長ヶ原誠、山口泰雄、池田勝「高齢者におけるスポーツ活動への再社会化に関する研究」（1992）鹿屋体育大学学術研究紀要 第7号
- 橋本純一編「スポーツの観戦学」（2010）世界思想社
- 東大阪市 HP「ラグビーワールドカップ誘致活動」（<http://www.city.higashiosaka.lg.jp/category/6-3-1-0-0.html>）
- 木部克彦、四家秀治「ラグビーの逆襲」（2011）言視舎
- 木田悟、高橋義雄、藤口光紀「スポーツで地域を拓く」（2013）東京大学出版会
- 長積仁、原田宗彦編「スポーツ産業論第5版」（2011）杏林書院
- 成見宏樹「フィフティーン！」（2011）ラグビーマガジン6月号No.465 ベースボールマガジン社
- 重松清「夢・続投！マスタース甲子園」（2007）朝日新聞社
- 読売新聞「ラグビーW杯わが街で」（2014.1.7 夕刊）、「花園ラグビー場、近鉄が東大阪市に売却へ」（2014.2.11 夕刊）